

# な か ま

発行  
佐倉市立中央公民館  
編集  
なかま編集委員会  
〒285-0025  
佐倉市鎚木町 198-3  
電話 (043) 485-1801

人生随想----- 坂本 靖之 兄貴の出現----- 吉井 弘  
モンゴメリと花子の赤毛のアン展---- 岩井 糸子 母の帽子----- 栄藤 公子

## コレラと養生所

金井 義彰

嘉永7年(1854)、幕府はアメリカと和親条約を締結、下田、函館を開港し20年以上続けたいわゆる鎖国に終止符を打ち開国に踏み切ります。そして翌年、海防政策の一環としてオランダ政府の援助のもとに長崎に海軍伝習所を開設しました。

伝習所は医学も教えました。医学伝習の二代目の教官として来日したのが、オランダ二等軍医のポンペでした。ポンペは南オランダ、フランドル地方のブリッゲの生まれ、ユトレヒトの医学校を卒業し、軍医となり東インドに赴任、スマトラなど各地を転任後、安政4年、長崎に来たときは28歳でした。長崎奉行所西役所内に教室を設け日本の医師たち、伝習生にヨーロッパ式の近代医学の教育をはじめました。幕府

の医官の松本良順が、ポンペの助手をつとめ参加者は当初十数名。良順がポンペに医学上の質問をして他の者がそれを傍聴する。通訳を介して授業が行われました。

先生のポンペは日本語がわからない。生徒も良順他1、2名を除いてオランダ語がわからない。通訳は医学の専門用語に戸惑う始末。困難を極めた授業でした。

ところで、江戸時代に流行した伝染病といえばコレラでした。インドのデルタ地方で流行したコレラは世界各地に広がり、何度も世界的大流行を繰り返しました。安政5年には中国経由で長崎に入港したアメリカ軍艦の乗組員のなかにコレラ患者がいて、これがもとで長崎でも大流行しました。当時、コレラの病原菌は発

見されていません。適切な治療法も対策も知られていません。突然の腹痛と嘔吐、下痢を繰り返し発病から3日で亡くなるので三日こりりといって怖られました。厄介なコレラの治療にポンペは伝習生たちとともに活躍しました。

さて、伝習所は生徒が多くなり教室が手狭になったため、他に移転しましたが、ポンペはコレラ流行を機会に医学所に併設した医療施設の建設を幕府に上申し、文久元年(1861)養生所と名付けられたヨーロッパ式病院が長崎村小島郷に建てられました。

新村拓著『日本医療史』によると、養生所の病室には、ベッドが備えられ、手術室、隔離室、運動室、図書室、浴室、事務所などのある近代病院でした。

なお、佐倉でもここで学んだ佐藤尚中らの建議により養生所が建てられました。鎚木町の麻賀多神社の向かいに養生所跡の碑が建っています。

(編集委員)

## 人生随想

しばし立ち止まって想う私の人生は、そして今。

退職し一年余。企業人として忙しく働き、精神的にも肉体的にも見えぬプレッシャーから解放されたせい健康面で悪友である高血圧の数値も、心の平安と共に下がった。しかし、家族や友人達は私の毎日のスケジュールの多さに、仕事をしていた時よりも忙しいのとはと苦言を呈してくれる。そんなに急いで何かを達成させる訳でもないのにと自問自答する。

確かに週休二日とほぼ同様にやそれ以上に働き、いや遊学しているようだ。生涯学習カレッジや生涯大学そして陶芸などで忙しいと言うと妻は「頼んでもいないのに忙しくしているのでしょう」と冷やかに応答してくる。その通りだ。だから疲れていると大きな声では言えない。毎日毎日

そこでの出逢いは新しい発見が待っている。1コマ1コマゆったりと流れる時間の中、図書館で『定年。ゆとりボラントリーアの愉しみ』（高畑敬一著）という本を読んだ。その中にこういった文章が強く脳を刺激した。「人は強くなければ生きられない。しかし優しさがなければ生きる資格がない」私の生き方は額に汗して、アクティブに生きるのと、高齢者の医療費や介護費用の節減に貢献し、定年後の生活を豊かなものにしていくものと手前勝手に自己満足している。

まだ、人生のエンディングには少し早いかも知れないが、そこまでは、生かされているく生きるく生きているく生きよう！一期一会から自分の明日への道を求めて、休まず一足を進める今の私がいる。

（大崎台 坂本 靖之）

## 兄貴の出現

恐らく、現代の高齢者は、結婚をしない息子や娘の問題をかかえている。

倅も同様である。

ところが、「機会」を得て相手を見つけた。だが、若夫婦は舅と姑に向かつて、仕事が忙しいこと、「産みたくな」と宣言（のたま）する。

この嫁が正月に、突然妊娠9か月と告白する。息子は父になる、「子孫とは孫の誕生で成立する」と思う。

老夫婦は歓喜し、狼狽（ろうばい）する。本当に驚愕（きやうがく）する。幸せと不安、二つ我にあり。

思いあぐねた末に、山の神（妻）の裁断（さいだん）に委ねることにした。

日本橋の水天宮への参詣である。行列対策として、近隣のホテルへ宿泊して、「岩田帯（おび）」を巻く習俗（しよぶく）をする。

語源（ごげん）は齋肌帯（いはだおび）からきている。

妊娠を祝って妊婦が腹に巻くこと。（注）

神の力を借りることにした。自分の役割の喪失である。赤ちゃんという嬰兒（えいじ）の顔である。

もはや、性別など関係がない。人として「発語（はつご）」は何といるのか。

私は考えぬいた末に、「兄貴（き）」家内は「おとめ」と呼称したいと通告する。息子夫婦に宣言する。そして、説教する破目（やぶめ）になった。

宿六は無口で、陰気で無気力、無能者（むのう）となった。細君の差配（さはい）によることになる。

私は孫との対面にそなえて、大変身する。男のキモノ「和服」を着用することにした。兄貴だから。

（注）谷沢永一『日本人のし

きたり』大和出版

2000年 126頁

（白井台 吉井 弘）

## モンゴメリと花子の 赤毛のアン展

今、NHK朝の連続TV小説で、花子とアンが放送されています。その物語は言うまでもなく、『赤毛のアン』の翻訳者村岡花子をモデルにしたお話です。1939年、第二次世界大戦の波にのみこまれる直前の日本から、カナダに戻った宣教師ミス・ショーから友情の証しとして、花子に贈られたのが『赤毛のアン』の原書でした。

今年には日加修好85周年記念という事で、原作者ルーシー・モード・モンゴメリと、花子の「赤毛のアン展」カナダと日本をつないだ運命の「一冊」が、日本橋三越で開催されています。本好きの私としては、出かけるしかありません。たまたま私の仕事が連休に当たり、初日雨の日はパスして、2日目5月22日に出かけてきました。平日でも私と同じ年代と思われる方々が

たくさん会場に見えていました。その日は再入場可というので、ひとりでお出向いた私は、フリーで気ままに一旦外に出て、ランチ場所を探しました。街にはサラリーマンと財布片手のOLが、各々お目当てのお店に向かっています。時間からしてどこも混んでいるようです。私は御上りさん気分です。長崎チャンポンのお店に入りました。サラリーマンが両サイドのカウンター席に座り、食べたのは、長崎チャンポン。それしかないお店なのです。

本題に戻ります。赤毛のアン展にはご夫婦連れらしき方も何組かみえていました。赤毛のアンのの舞台が、カナダのプリンス・エドワード島と知り、へえ〜イギリスかと思っただけと言う男の人の声がありました。心の中で、「へえ〜、へえ〜、私も」と。何を以て私は本好きと言えるのでしょうか？ごきげんよう!!

(上座 岩井 糸子)

## 母の帽子

ひだまりの母が口ずさむ「早春賦」少し外れて少し愛かなしき小鳥の声で目覚めし母は食卓のパンを見ている鳥の眼をして日に七度目薬注しやる九十歳きゅうじゅうの母のまつ毛は意外にながい多忙なる今日もなせずに日の暮れる 札状書くこと母の爪切り

話し方を忘れし母よおぼおぼと母の鏡にわたしが映る

海色うみいろの桔梗ききょうしずけく咲きはじめ病み伏す母の眠りは深し

つくねんと母座すようで棄てられず箆へらの上うへに置かれた帽子

無意識に茶碗蒸し四つも作りおりこの世に母はもういないのに

枯葉色かまきりの蟪蛄かまきりかぜに吹かれきて翅はねをたためば神のごと静か

石路つわぶきの花の黄褪つわぶきせたりコーヒーに寂しさの分だけミルクを足しぬ

母の庭に水仙の花咲きそろい慎み深く降る今日の雨

亡き人の帽子を高く投げあげる そのためだけの青空がある

(井野 栄藤 公子)

## 9月の黒板

# 『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鏑木町198-3

URL <http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-01.html>

### さくら道

私には自分に言い聞かせている格言がある。それは「過ぎたるは及ばざるが如し」。

10年程前のことであるが、近所にスポーツジムが出来たのを機に通い始め「筋トレ」にはまってしまったのである。トレーニングがハードであればある程「効果大」との思いで勝手に所定のメニュー以上に頑張ってしまったのである。暫くは体調が良くなり体も

絞られて絶好調であったが、さらに続けるうちに「ハードワーク」のツケが来てしまい残念ながら止めざるを得なくなってしまう。それ以来、何事も過ぎることなくを守っているが、リタイアし「サンデー毎日」のこれから考えた時、充実した日々が送れる様について「過ぎたものを見つけないと願っている」。

（坂田 和孝）

### あとがき

この新学期から『なかま』編集委員に選出され、身体は編集会議に出席するも心は何をするのか戸惑っている。丁度そんな時期、うまく運営を考えた「なかま紙面担当表」なる代物が提供された。レールが適当に敷かれて傍観は許されない仕組みが決められて義務と責任上やるしかない。市民の皆さんからの投稿は何を物語っているのでしょうか。

平成24年5月から平成26年7月までの2年2ヶ月分掲載した108作の解析を試みてみました。

- ①趣味・旅行 45件（41%）
- ②家庭・故郷 27件（25%）
- ③歴史 18件（17%）
- ④環境・震災 18件（17%）

圧倒的に趣味に関する投稿が多く、身近な話題が喜ばれた。私の胸を熱くした作は平成25年7月夫婦愛を巧みに表現された「夫から妻へのラブレター」です。

（井手 季雄）